

ジョン・F・ケネディとベトナム戦争 —— 1963年の「失われた機会」神話をめぐって ——

松岡 完

はじめに

ベトナム戦争が本格化したのは1964年のトンキン湾事件以降、ジョンソン (Lyndon B. Johnson) 政権下のことである。そのジョンソンが大統領となったのは、前任者ケネディ (John F. Kennedy) が暗殺者の凶弾に倒れたからにはほかならない。そこで少なからぬ者が、ケネディが生きていさえすればベトナム戦争などなかったはずだと考える。その前提にあるのは、ケネディは生前ベトナム介入の行く手に泥沼を予見し、そこから手を引く決意を固めており、残る問題はその時期や手法だけだったという主張である。¹

ピアソン (Lester B. Pearson) カナダ首相がケネディに向かって、アメリカはベトナムから撤退すべきだと勧めた時、ケネディはこう応じたという。「それは拙劣なお答ですね。だれだってそのことは知っていますよ。問題は、どうやって手を引くのか、ということです」。この会話を記録したケネディの演説起草者ソレンセン (Theodore C. Sorensen) は、「この問題に彼は1963～64年の冬の間、もっと多くの時間をかけ、その結果、解答を見つけ出したであろう」との確信を披瀝している。²

だが第1に、ケネディの政界入り以来の側近オドンネル (Kenneth P. O'Donnell) によれば、彼には撤退の手だてを模索する必要すらなかった。すでに在任中その答えは明らかだったからである。アメリカの威信を損なわずに東南アジアからどのように手を引くのかと問われた際、ケネディの口から出たのは「簡単さ」という言葉だった。彼は続けた。「われわれに出て行けと求めるような政府をそこにつくればいいのさ」。³

大統領の弟で司法長官だったロバート (Robert F. Kennedy) ものちに、兄が生きていれば「ラオス型解決、つまりわれわれに出ていけと求めるような人々による、何らかの形の連合政府」を生み出したに違いないと述べている。ケネディは別の機会に、親しい記者の1人バートレット (Charles Bartlett) に「ベトナムに居座るつもりなど毛頭ない。あそこで勝てる見込みはないのだ。あの連中はわれわれを憎んでいる。いつ何時彼らがわれわれをおっぼり出すかわかったものではない」とまで語っている。⁴

第2に、オドンネルはケネディが、南ベトナム (ベトナム共和国) を率いる反共主義者「ジエム (Ngo Dinh Diem) のサイゴン政府と共産主義のベトコン [民族解放戦線 (NLF)] との戦いを、双方の政治的妥協によって停止させることができないかと

希望」していたという。それが実現しなかったのは、ひとえにジェムとその弟ニュー (Ngo Dinh Nhu)、その夫人ら南ベトナムの指導者たちのせいだった。「ニュー夫妻が権力の座にある限り、ジェム政府とベトコンの間には平和的解決どころか一時的な休戦協定でさえ、得られる見込みなどまったくなかったし、ジェムを説得して弟と手を切らせる試みもすべて無に帰した」というわけである。⁵

だが事実は違う。1963年春以降、南ベトナムではまさにケネディが望んでいたはずの事態、つまりベトナム側からアメリカへの撤退要求が現実の問題となっていた。また、ケネディ不慮の死以前に、ジェム政権のもとで、北ベトナム (ベトナム民主共和国) との和解をめざす試みが始動してもいた。そして本稿が依拠するアメリカ側の一次史料に見るように、いずれの動きも時々刻々ワシントンに伝えられ、ケネディ政権のベトナム政策決定に投影されていたのである。

ベトナムから手を引く機会が、少なくとも2つの異なった形でケネディの前に存在していたことは明らかである。にもかかわらずケネディがそれを活用せず、あるいはできなかったのはなぜなのか。ケネディの崇拜者、つまり「生きていたら」論者たちはそれには十分答えようとしない。だがこの問題を抜きにして、彼が暗殺されなかったらと夢想しても無意味だろう。ソレンセンはケネディ死後の急速な偶像化について、ケネディが「いかに死んだかではなく、いかに生きたかによって記憶されるほうがより重要」だと述べている。本稿は、ケネディの分身とさえいわれた彼の言葉に従って、1963年に顕在化した2つの「失われた機会」へのケネディの対応を検証したい。⁶

1. 米軍撤退要求の始まり

1.1. 軍事顧問削減を求める

1963年4月5日、南ベトナムのゴ・ジン・ジェム大統領はノルティング (Frederick E. Nolting, Jr.) 駐サイゴン米大使に、アメリカの支援を「消滅はさせずに削減する」よう訴えた。具体的には、南ベトナム各地で活動する米軍事顧問をじょじょに減らすことである。米中央情報局 (CIA) が得た情報では、ほぼ同じ頃、秘密警察や情報機関、与党カンラオ (Can Lao)、共和国青年団を一手に掌握する弟のゴ・ジン・ニューも、ある政府内の会合で「南ベトナムにいる米顧問は多すぎる。これら顧問の人数も、アメリカの援助の総量も減らすべきだ」と発言していた。⁷

4月12日、ニューはリチャードソン (John H. Richardson) CIA サイゴン支局長に、米軍事顧問は少なくとも500人、できれば3～4000人程度帰国させることが「有益」だろうと述べた。同じ頃、彼はあるオーストラリア人外交官に、米軍事顧問約1万2000人の半数は引き揚げ可能だといっている。⁸5月12日、米紙『ワシントン・ポスト』

のインタビューに答えたニューは、南ベトナムにいる1万2～3000人の米軍事顧問のうち半分を出国させたいと公言した。こうしてベトナム側による主導権のもと、ノルディング大使のいう「アメリカのベトナムにおける存在を縮小させようとする、不快きあまりないキャンペーン」が始まる。⁹

ワシントンには過剰反応を戒める声もあった。国際開発局（AID）で極東への援助対策を担当するジャノウ（Seymour J. Janow）は、こうした反抗の対象がもっぱら各地での米軍事援助顧問団（MAAG）の活動に限られているとし、けっしてアメリカの支援全体、たとえば経済援助にかかわる活動を全面攻撃するものではないと論じた。だが実際には、削減の対象となったのは軍事顧問だけではなかった。9月6日、CIA要員との会見でニューは「サイゴンにはアメリカの文官が多すぎ、彼らの一部はいつも反ベトナム政府運動を続けている」と不平を鳴らした。同じ頃、彼がサイゴン駐在の仏大使ラルエット（Roger Lalouette）に「現在の困難な状況を鎮静化したら、米顧問を追い払うつもり」だと語ったとの報告が、ロンドンの米大使館を経由してワシントンに届いた。¹⁰

10月初め、ニューはあるイタリア人記者によるインタビューで「アメリカの援助には価値があるが、アメリカの存在と顧問には価値はない。アメリカ人はゲリラ戦争などについて何も知らない」といいはなった。この記者は「ニューはもしそれがアメリカの存在を除去する代価だとしたら、アメリカの援助をあきらめるつもり」だとの強烈な印象を受け、それをアメリカ側にも伝えている。10月末、つまりジェム政権崩壊直前になると、ニューは「隅に追いつめられた獣のように反応」し、アメリカへの軽蔑もあらわに「彼の国がアメリカ人への依存から脱するため、考えうるありとあらゆる道筋を模索」していたと、サイゴンの米大使館で広報を担当していたメクリン（John Mecklin）はいう。ニューにとってみれば、アメリカ人のすべてが目障りだったのである。¹¹

1.2. ジェム政府側の動機

こうした動きはなにも今に始まったことではなかった。CIAの報告では、ジェム政府は「南ベトナムの諸問題にアメリカが関与することで生じる影響をいつも懸念」していたし、時に「南ベトナムにおけるアメリカの活動と存在の制限」を試みていた。ジェム自身、4月5日にノルディング大使に向かって、「本当の問題」は「アメリカがあまりに多くの人員をここに置いており、彼らがあまりに多くの問題に、詳細すぎる助言を与えていること」だと訴えている。「国民は、アメリカ人こそがいまや政府であり彼らはわが政府の地方官僚の権威を無視していると信じるようになっていく」というのが彼の苦情だった。¹²

ジェムは1963年春、ラルエット仏大使に米軍事顧問への不満をおちまけている。「彼

らは旅券も持たずにやってきている。だから何人いるのかもわからないし、彼らをどう管理したらいいかもわからない」というわけである。ベトナムにやってくるアメリカ人がベトナム政府発給の査証を持つかどうかは「国家としての矜持にかかわる問題」なのだと、ニューも9月初めにノルティングにいていた。¹³ 1962年までCIAサイゴン支局長をつとめたコルビー（William Colby）元長官代理（極東担当）によれば、グエン・ジン・トゥアン（Nguyen Dinh Thuan）国務相は対米関係のあらゆる重要な側面を取り仕切る重要人物だったが、ベトナム人のある将軍は、彼が米軍事顧問の実数をひたすらジェムから隠していたと回顧している。¹⁴

ジェムは、アメリカ人は要求するばかりでこちらのいうことはまるで聞こうとしない、ひたすらこの国を米軍で覆い尽くすことを求めてくるとも漏らしていた。彼はまた、軍事面でもそれ以外でも、アメリカがこの国のすべてを牛耳ろうとしているとも感じていた。CIAの情報分析官だったクーパー（Chester L. Cooper）は「アメリカ側は、もっと多くの顧問を送り、もっとたくさん助言を、より多くの人々に与えることを求めていた」から、「ジェムと彼の弟が不安をおぼえたのも驚くべきことではなかった」と述懐する。¹⁵

ジェムの猛烈な反抗の根にあったのは、彼自身について「アメリカが抱く意図への猜疑の念」であり、同時に「アメリカの存在が拡大すれば、ジェムの政治的優越を最後は脅かしかねないような政治勢力に動きを与える」との懸念だとCIAは分析した。マクナマラ（Robert S. McNamara）国防長官がのちにいうように、1963年夏を迎える頃のジェム政権にとって「喫緊の問題」とは、まさにアメリカ人の存在そのものだった。¹⁶

ジェムはノルティングに、「とくに下のレベルで、またベトナム政府のあらゆる活動において見られることだが、アメリカ人はその数と熱意のゆえに、アメリカが南ベトナムを『保護国』とみなしているという印象を、ベトナム政府の組織内部にも国民の間にもつくりだしている」と不快感をあらわにした。ノルティングがどう説得しても「これほど多くのアメリカ人が当地にいたことが、アメリカの保護国という印象を生み出しているのだ」というジェムの確信を変えることはできなかった。メクリンによれば、ゲリラ戦争を効率的に遂行し勝利をおさめる必要から、南ベトナム政府のほとんどあらゆる部署にまんべんなくアメリカ人を配置する「並立システム」が採用されていたからなおさらだった。¹⁷

ベトナム側には、米軍の能力じたいにも強い不信感があった。ヒルズマン（Roger Hilsman）極東担当国務次官補によれば、要するにそれはアメリカ人が「この種の戦いのやり方などまるでわきまえていない」という確信である。ニューはケネディご自慢の特殊部隊（グリーンベレー）でさえ「何の役にも立たない」といいはなち、「アメリカ人と一緒では戦争に勝てない。なぜなら勝利の前提条件である革命的な社会

変革には邪魔になるからだ」と述べた。1963年秋、彼は「アメリカ人がいなくても2～3年のうちには戦争に勝てるだろう。アメリカ人がいればどうなるか、誰にもわからない。たぶん絶対に勝てないだろう。アメリカはこの種の戦争を理解していないのだ」と断言したとメクリンはいう。¹⁸

加えて、現地でアメリカに協力していた英軍事顧問団（BRIAM）のゲリラ専門家トンプソン（Robert G. K. Thompson）がいうように、米軍の撤退という選択肢は、共産側と和平交渉を行う場合「ニューが持つ唯一の切り札」となるはずだった。マクナマラ国防長官の回顧によれば、9月末にサイゴンを訪れた彼に向かって、パチカン大使のアスタ（Salvatore Asta）司教は「もしニューが権力を握れば、何よりもまずアメリカに出て行けというだろう。そして共産主義者と取引に踏み切るだろう」と警告した。のちに米上院外交委員会に報告されたところでは、同じ頃、CIAもニューが「北と交渉し、アメリカ人に出て行けという」計画を進めつつあるとの情報を入手していた。¹⁹

2. ワシントンの対応

2.1. 懸念と反発

米軍事顧問半減を要求した5月12日のニュー発言は米国内で広く報じられ、猛反発を生んだ。その「反応はとりわけ議会で強烈」だった。²⁰直後、国務省から下院外交委員会に出席した何人かは、アメリカのジェム政権支援政策をめぐって議員たちの厳しい批判にさらされた。その1人、対外援助局のジャノウは、委員会が「あまり快適な環境ではなかった」と苦々しげに述べている。²¹

だが、すでに米軍撤退の方策を模索中だったケネディは、ニュー発言にいたく興味をかきたてられたとも指摘されている。国務省の法律顧問ウッド（Chalmers B. Wood）は4月半ばすぎ、米軍事顧問の存在は「ベトナム人との間で厄介な問題」になっているとして、年末までにかかなりの人数を撤収するよう提案していた。同じ頃、ラスク国務長官はサイゴンのノルティン^{ホワイト}グ大使に、「『安全』と宣言されたどの省でも、たとえば90日以内に米軍事顧問の人数をかなりの程度削減することを、こちら側から申し出るべきかどうか」について検討して欲しいと求めている。²²

実際に5月22日の記者会見でニュー発言についてのコメントを求められたケネディは「われわれは南ベトナム政府がそう提案すればいつでも、人数の如何を問わず軍隊を引き揚げるつもりである。そうした提案がなされた翌日には、軍隊の一部を帰国させる」と明言した。しかも「もし要請されれば、われわれは即座にそうする」と強調している。ケネディにとってそれは待望の機会到来を意味していた。

しかし、にもかかわらず、彼はこうも付け加えていた。「われわれは南ベトナム情

勢が好転し、いずれにせよ年末までに一部の撤退が可能となることを望んでいるが、今の時点ではたぶんそう判断することはできない。長く、きびしい戦いはまだ続いている。……現段階での情勢は、わが国が今年末までに軍隊を引き揚げたり撤退を開始したりできるほど空が明るくなってきたと認められるほどではない」。彼は戦局の好転という条件をつけることによって、せっかくジェムやニューが与えてくれた引き揚げの機会から目をそらしてしまったのである。²³

その理由の第1は、その「直接の結果として、わが国のベトナム政策に対して国内でかなりの批判と反対論が予想される」ことだった。このような野放図な発言が続くようでは「米政府がベトナム計画を弁護するのに、控えめにいっても困難が生じている」し、どう取り繕おうと「悪印象が長続き」する恐れがあった。²⁴

第2に、「すでに存在している、南ベトナムからの完全撤退を求める米国内の圧力」をいっそう刺激する恐れがあったことである。つまりケネディはまだ、あらゆる機会を捉えてベトナムから引き上げるほどの決意を固めてはいなかったのである。少なくとも、撤退を急ぐほどにはベトナムにおける前途を悲観していなかったのだといわざるをえない。²⁵

4月3日、ノルティングはジェムに、「アメリカの支援を求め、受け入れたのは彼のほう」であり、アメリカ側には「彼の政府の主権を侵害する意図もそうした行為もない」と伝えた。また、「われわれにはこの国をアメリカ人であふれさせるつもりなどまったくない」ともいった。しかしより重要なのは、彼が「これまでの当地での投資を考えれば、われわれが目と耳を、そして助言するという発言権を持つ必要はいくぶんありうる。さもなくば現在の規模でわが国の支援は不可能である」ときつく釘を刺したことである。アメリカにはベトナムから出て行く用意などまだなかった。むしろ、あくまでとどまり、戦い続ける意欲満々だったのである。²⁶

ラスク (Dean Rusk) 国務長官はニュー発言の翌日、これを「無視できない」問題だとし、ジェムにこう伝えるようノルティングにはっきりと指示した。アメリカの損害も出費も、そもそも「ベトナム政府の求めで供給している援助から生じている」のだ。しかも「ベトコンの脅威が減少し、ベトナム政府の軍事的能力が改善され、その結果われわれが軍事的存在を大幅に削減しても危険は生じないという段階にはまだ達していないと考える。ベトナム政府も同じ見解であると思う」。²⁷

1963年秋、駐サイゴン大使となつてほどないロッジ (Henry Cabot Lodge, Jr.) は「北ベトナムとの交渉の推移の中で、もしニューがアメリカに南ベトナムを出て行くか、大幅に部隊を削減するよう要求された場合、われわれの対応はいかにあるべきか」検討するよう国務省に求めている。だがかりにジェム政権が力づくでアメリカの追い出しにかかったとしても「米軍がベトナム政府の軍事的な力によって撤退を余儀なくされる可能性は想定できない」というのがフェルト (Harry D. Felt) 太平洋軍司令長官

の判断だった。メクリンによれば、アメリカの援助停止が懸念された頃、ニューはそれを「ベトナムを支配するための嘘」、つまり脅しにすぎないと見ていた。彼は「アメリカはベトナムにあまりに深く関与しており、支援を取りやめる危険など冒せない」と読み切っており、南ベトナム政府軍にもそう指示していた。²⁸

ケネディはその死の直前、「アメリカ人を帰国させ、南ベトナム人たちが自国を自由な、独立した国として保てるようにし、国内の民主勢力がうまく働くようにすること」が自分たちの目的だと述べている。ケネディの側近ソレンセンはのちに「どこであろうと現地政府の意向に反してまで東南アジアにとどまるつもりはないと、大統領は繰り返し述べていた」と力説している。だが、彼は続けてこうも認めた。「しかしその国の政府の利害とは別に、わが国がそこにとどまることには自由世界の安全がかかっていた。赤色中国の主目標は、東南アジアから——そしてもちろんアジアから——彼らの覇権を阻止する唯一の効果的手段である、西側の力と影響力の痕跡をいっさい排除することだった。……こうした状況から一時的な米軍の駐留が必要である限り、アメリカと共産勢力の目的は対立していた。この紛争が試された主たる闘鶏場が不運な南ベトナムだったが、ケネディも共産陣営も、この国での成否の影響がベトナムだけに限られないと確信していた」。ベトナム側の要求を利用し、政治的危険を最小限にとどめた撤退——それはしよせん絵空事にすぎなかったのである。²⁹

2.2. 事態收拾に躍起

アメリカ側はジェムやニューの突然の強硬姿勢に怒りと戸惑いをおぼえつつ、両国関係の悪化を恐れ、隠忍自重を心がけた。国務省内のベトナム特別作業班の一員ヒーブナー（Theodore J. C. Heavner）はこう分析している。「もし懲罰的な行動をとったりそうした行動の脅しをかけたりすれば、両国共同での戦争遂行の基礎とならねばならない相互信頼がさらに浸食されるであろうことは認識しなくてはならない。それは今すぐか後かはわからないが、全面对決の可能性が大きく増大することを意味する」。ラスクもノルティングに、「眼前の状況を変えるのにできることがあるかどうかは疑わしい」としながらも、「引き続きジェムとニューの双方に働きかけを続ける機会を見い出せるよう希望」するしかなかった。³⁰

ベトナム側もけっして強硬姿勢一点張りではなかった。ジェムが米軍事顧問の縮小を示唆した直後、グエン・ジン・トゥアン国務相は「アメリカとの基本的な関係は変えたくない」し、「ベトナム政府はアメリカの顧問的・支援的役割の削減を望んでいない」との意向を示している。³¹ ニューも、5月12日の問題発言は「間違っただけで引用された」にすぎないとアメリカ側に繰り返し、つまるところごまかしにかかった。³²

5月17日、両国はジェム大統領とノルティング大使の名で共同声明を発表する。両国はかねて進められてきた反乱鎮圧計画、なかんずく戦略村建設のめざましい進展

ぶりを強調したうえで、「アメリカがベトナムで行っている助言および支援の規模は、治安上の必要、および戦略村計画が想定しているような経済的・社会的進歩を全土にもたらす必要と直接に結びついている。今の時点では現状規模の助言と支援が依然として必要であるが、治安状況が改善され、戦略村計画が進捗すれば、外国からの援助は物的にも人的にもじょじょに軽減されていくと期待される」とした。³³

6日後、ニューはノルティングに、「南ベトナムは自由な国家として存続するためには、あらゆる分野で自給自足できるよう尽力しなければならない。外国からの援助が現在の規模で長期間続くとは期待できないし、それが不必要にするのはベトナム国民の責任だ」と語った。まだ「アメリカの顧問的・支援的役割を減少させる機は熟していない」が、「ベトナムを可能な限り早急に自給可能な体制にし、友人の重荷を軽減」することを目指しているというのがニューの弁だった。³⁴

7月、国務省で世論対策にあたるマニング(Robert Manning)がサイゴンを訪れた時、ニューは「低開発であり人口は1400万人しかない、ベトナムのようなちっぽけな国」が共産世界の挑戦に立ち向かうにあたっては「ベトナム人がその小さな肩にこの重荷を担えるかどうか？」が問題だと述べた。それには「誠実な友人の助力が必要」なことは明らかであり、とりわけ「アメリカの援助がベトナムにとってきわめて重要」なのだとは力説したのである。その後、両国はまるで何も起きなかったかのように振る舞った。後には、ケネディがせっかくの好機をむざむざ逸したという事実だけが残った。³⁵

それどころか、ラルエット仏大使がのちに語ったところでは、米軍事顧問の撤収を要求したことが、ジェム政権がフランスにすり寄ったことと並んで、1963年11月のジェム政権転覆の「中心的理由」となったという。実際に、国務省ベトナム特別作業班のヒーブナーは、そうした要求が「政府の変更以外の手段では止められないだろう」と懸念していた。10月初め、ロッジ大使は「ジェムとニューは、アメリカがニュー夫妻の除去や学生の釈放といった、彼らが絶対に認められない事柄を要求している」と見ており、撤退要求の可能性が今後高まると考えるべきである。撤退が始まれば、それがクーデターの引き金になる可能性がある」と本国に打電している。ニュー発言をめぐる騒動は、当然のことながら両国間の摩擦を強め、破局につながるいくつかの道筋の1つとなったのである。³⁶

3. ハノイとの秘密交渉

3.1. 南北の接触を模索

1963年5月、ハノイを訪れた国際監視委員会(ICC)のポーランド代表マネリ

(Mieczyslaw Maneli) は、北ベトナムのファン・バン・ドン (Pham Van Dong) 首相に、ジェムがアメリカの存在を減少させることを望んでおり、また北との和解を考えてもいると伝えた。ドンは懐疑的だったというが、もしジェムが本気ならその手始めに北の鉱物資源と南のコメ・ゴムなどとの貿易を行うのがよいだろうと述べた。³⁷

8月25日夜、共産主義国の外交官として初めて、マネリは大統領官邸であるジアロン宮に招かれた。チュオン・コン・クー (Truong Con Cuu) 新外相就任レセプションのためである。この時ニューはマネリにこう語ったという。ポーランドとベトナムには、巨大な隣国と戦い続けてきたという共通点がある。当然のことながらベトナム人は自国の主権に敏感であり、あらゆる占領者や植民者に不信感を持っている。ニューはさらに、自分たちにはジュネーヴ協定を尊重する意思があるとも付け加えた。³⁸ 8月末、サイゴンの各国外交官の間ではニューと北との接触は「公然の秘密」だったと、CIA サイゴン支局は報告した。³⁹

9月2日、再度ジアロン宮を訪れたマネリはニューに、事実上ベトコン側から休戦を求めるという北の指導者ホー・チ・ミン (Ho Chi Minh) の提案を伝えた。この時、ニューは休戦、南北貿易のいずれも拒否した。ニュー自身がある CIA 要員に語ったところによれば、彼はマネリに「南ベトナムはアメリカと同盟を結んでおり、こうした問題をアメリカ人の背後で一方的に探求するのは『不道徳的行為』である」と、じつに殊勝な返答を与えたという。⁴⁰

だがこの時ニューは、自分たちは北との協力や交渉にはけっして反対ではないし、誰がベトナム人で誰が外国人であるのかもわきまえている、つまりたとえ戦っていても自分たちは同じベトナム人なのだと述べていた。CIA には、北からの休戦提案にニューが興味を示しており、実際に対応を検討中との情報も寄せられた。⁴¹ この頃サイゴンの街は、南北秘密折衝の噂で持ちきりだったという。⁴²

マネリ以外にも「ゴ・ジン・ニューとファン・バン・ドンをつなぐチャンネル」が存在していた。ラルエット仏大使である。もっともフランス側は「とてつもない煙幕」を張り、関与を否定していた。⁴³ しかし8月末、コルビー元 CIA サイゴン支局長は、「ニューがフランスをつうじてベトナム民主共和国と話をしている可能性がある」と判断していた。実際にラルエットはハノイ駐在の仏外交官をジェムに会わせている。彼はホーが南との交渉に乗り気だとし、アメリカの撤退を実現できるのであれば統一後ジェムを国家元首にしてもよいとのホーのメッセージをジェムに伝えた。⁴⁴

ラルエットは南ベトナムとアメリカの同盟関係の行方に暗雲を予見し、かねてジェムやニューにアメリカと距離を置くよう勧め、その一環として米軍事顧問の出国を要求してはどうかと提案していた。⁴⁵ 8月末にロッジが得た情報によれば、彼は「アメリカ政府がベトナムから出ていき、フランスが南北ベトナムの仲介役になりたいと思っている」人物でもあった。⁴⁶

9月中旬、ラルエットは本国の命を受けて帰国、仏大使館はサイゴンの外交活動における中心的存在ではなくなってしまふ。⁴⁷しかし彼以外にも、国際監視委員会のインド代表（議長）を兼ねるゴブルダム（Ramchundur Goburdhum）大使、法王庁のアスタ大使、ドルランディ（Giovanni d'Orlandi）イタリア大使ら、南北の仲介に尽力する外交官たちがいた。南北交渉の道筋はいくつも存在していたのである。⁴⁸

3.2. ニューの目論見とは

ニューがハノイや民族解放戦線との接触に踏み切ったのは、戦争を有利に運ぶためである。直接の効果としては、ベトコンの脱走を促し、あるいは寝返らせる手だてとなるはずだったとノルティング大使はいう。CIAの報告では、ニューは南ベトナム軍の将軍たちに、「北の兄弟たちとの接触」によって、「北から南のゲリラに、より永続的な解決をめざす交渉の間は作戦を緩和させることで、息つぎの間を確保できる」と述べている。うまくすれば「彼ら〔ベトコン〕を味方につけ、北ベトナムに反旗を翻させる」ことができるとニューは期待したのである。⁴⁹

戦局への楽観もあった。ホワイトハウス・スタッフの1人だったフォレストル（Michael V. Forrestal）は、ニューが対ベトコン戦争の進捗を確信し、自分の立場を「ハノイと取引できるほど十分強力」になったとみなしていたという。もちろんその場合、取引材料となるのはアメリカの撤退である。9月半ば、英軍事顧問団のトンプソンは着任後まもないロッジ米大使に、「ニューはいつも北ベトナムとの交渉を考えており、自分は非常に賢いのでそれを首尾よくなしとげられるし、しかも彼が見るとこと南ベトナムは2年前よりよほど強い立場にあるのだからと確信している」と伝えている。いっぽう、まったく逆に、敗北を予感したニューが保身、権力維持のためハノイとの取引に踏み切ったのだとの説もある。⁵⁰

それはアメリカを排除する手段の1つでもあった。コルビー元CIAサイゴン支局長は、ニューの動きを「もしアメリカ人が南ベトナムに対して著しい敵意を示すようなら、アメリカ人を出し抜けるような形でベトナム人どうしの戦いに決着をつける」企てと見ていた。ラスクは8月末、ニューが「クーデターが成功すれば、権力と、おそらくは命も失うことになろう。だからニューには失う物は何もなく、われわれはニューを相手にする時にはこの事実を忘れてはならない。ニューがアメリカ人を追い出すのに北ベトナムの助けを求めるときもありうる」と懸念していた。ニューの究極目標は第1に「北ベトナムと戦争休戦を求めて取引すること」、第2に「アメリカの存在を完全に除去すること」、そして第3に「『中立』ないし『ティトー主義』の、ただし分かれたままの南ベトナム」を実現することだとヒルズマン極東担当国務次官補は観測していた。⁵¹

9月末に南ベトナムを訪れたマクナマラは、「ニューが完全に権力を掌握したら、

まず最初にやることはアメリカに出て行けと要求し、それから共産主義者と取引することだろう。そうすれば彼はベトナム全土の主人になれるからだ。もちろん共産側は絶対にそうさせないだろうが」と聞かされた。グエン・ゴク・ト (Nguyen Ngoc Tho) 副大統領はのちに、ジェムもニューも、戦争拡大に突き進むアメリカがこの国の全土を戦場に叩き込みないと恐れ、敵との取引しか残る手はないと確信したのだという。⁵²

コルビーはそれが「共産主義者とアメリカとの間で彼らが陥った袋小路からなんとかして抜け出そうともがく」試みだったと述懐する。アメリカは、ジェム政権に改革と仏教徒危機解決を強要すべく対南ベトナム援助の一部停止を検討していたが、ヒューズ (Thomas L. Hughes) 国務省情報調査局長は、ベトナム人の間でも外国人の目にも、そうなればニューが他国に支援を仰ぐだけでなく、必要ならハノイと取引に踏み切る可能性が高いと見られていた。⁵³ 実際にニューの動きは援助停止に対するベトナム側独自の「アメリカによる援助削減の脅しに対抗する『制裁』」と解釈された。ジェム政権の仏教徒弾圧に抗議して辞任したブー・バン・マウ (Vu Van Mau) 前外相も、ニューの動きは「基本的にアメリカ人に対する脅迫状であり、援助を停止させないためのもの」だとの解釈を披瀝していた。⁵⁴

北との和解をめざす動きは、仏教徒危機の解決や政府の改革、国内の民主化など次々に要求をエスカレートさせる「アメリカ人に対して用いる武器」(メクリン) だった。国務省でベトナム問題を担当していたカッテンバーグ (Paul M. Kattenburg) がいうように、共産側との接触はとりもなおさず「アメリカに恐怖信号を送る」意図の反映だったからである。CIA サイゴン支局は、「アメリカが究極の制裁 (南ベトナムからの撤退) を用いるとの脅しをいくらかけても、ベトナム政府側が虚勢と解釈するのはほとんど確実」であるのに対し、「ベトナム政府はハノイとの何らかの合意という究極の制裁によって、もっと信憑性のある脅しをかけることができる」と指摘した。⁵⁵

じつは敵の側でも同じ見方があった。民族解放戦線の創設メンバーの1人であるチュオン・ニュー・タン (Truong Nhu Tang) は、彼らの内部でもニューが自分たちや北ベトナムと接触する「真の意図はアメリカ側をゆする」ことにあるとの見方があり、だから彼らはこれを「まじめに受けとるつもりはなかった」という。⁵⁶

ニューはCIA サイゴン支局員に面と向かって「ハノイへの秘密チャンネルなど持っていない」ととぼけることもあった。ニューは、ハノイとの交渉など「ゲリラ戦争に勝った後でのみ」可能なことだった。つまりその和平とは「強力な南ベトナムが北ベトナムを自由世界秩序に組み入れようとする枠組みの中で」実現されるべきものだと大見得を切っている。⁵⁷

だがしばしばニューは「ベトナム政府は必ずしも、ハノイからもたらされる間奏曲を考慮することを拒まない」姿勢をこれ見よがしに誇示した。ニューは北との接触

が「公然と知られるようにしていた」と『ニューヨーク・タイムズ』記者ハルバースタム (David Halberstam) は述べている。『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』の女性記者ヒギンズ (Marguerite Higgins) によれば、ニューの動きはノルティングやリチャードソンに「つねに伝えられていた」のである。彼は英大使館員に対しても——それは即座にアメリカ側に伝わるはずだった——北と定期的な交渉を行っていること、北の交渉相手は共産主義者というよりまず民族主義者であること、彼らとはベトナムの問題はベトナム人の手で解決すべきだという点で一致していることなどをあけすけに語っている。それどころか彼はそうした取引を「自慢していた」とフォレストルは述懐する。⁵⁸

ケネディの特別補佐官となった歴史学者シュレジンガー (Arthur M. Schlesinger, Jr.) は、ケネディが南北秘密交渉について知らなかった、少なくとも「この問題について十分な報告を受けたことは一度もなかった」という。だがノルティングは「われわれはニューがベトコン指導者と会っていることをかなり知っていた」と明言している。しかも「ニューが交渉解決を話しあうため、ベトコンとの接触を本気で確立しようと考えているとの情報が数を増していた」とメクリンもいう。マクナマラも、遅くとも1963年初夏までには北との秘密接触の報に接していた。⁵⁹

ヒルズマン極東担当国務次官補は8月31日、ニューが「何ヶ月も前に」北と接触していると報告している。ヒューズ情報調査局長もニューの秘密交渉をめぐる報告は「信憑性があり、広く知られているため、現況でどこまで正確かとは別に、軍や官僚機構の士気を低下させている」とラスクに伝えた。⁶⁰

9月初め、ラルエット仏大使はロッジ大使に「ニューはベトコンと取引をまとめ、ゲリラ戦争を終わらせることができると思っている」だけでなく、その取引材料が「米軍の一部撤退」なのだと伝えている。CIAにはすでに南北交渉をめぐる「相当数の報告」が寄せられていたし、ニュー自身があるCIA要員にマネリとの会見について詳しく語ったり、解放戦線との接触を認めたりもしていた。⁶¹

9月18日には『ワシントン・ポスト』が米国内の主要紙としては初めてこの問題を報じたが、それはホワイトハウスの意を汲み、南北和解を画策するフランスと、アメリカや下手をするとジェムを裏切っているニューを批判する目的があったともいわれる。その翌日、マッコーン (John A. McCone) CIA長官はケネディの指示でアイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 前大統領に会い、「ニューがハノイと接触しているという証拠がある」と述べたばかりでなく、「メコンデルタのコメがいくらかでも入手できるようになり、また米軍を南ベトナムから追い出せるのなら、ホー・チ・ミンはどのような代価でも支払うことは確実」との観測を伝えている。ジェム打倒クーデターにも参加し、のち国防相にもなるチャン・バン・ドン (Tran Van Don) 将軍がいうように、ニューが秘密の内に共産主義者と協力しているのではとの疑いを持つ者

は、アメリカ人を含めて少なくなかったのである。⁶²

4. アメリカの拒絶反応

4.1. 深まる疑念

バンディ (William P. Bundy) 国家安全保障問題担当国防次官補は、たしかにハノイとの取引の情報はあったが「サイゴンでもワシントンでも真面目に受け取られなかった」といっている。ヒルズマンものちに、北との接触など「無意味」だったしケネディ政権内で「誰一人それを恐れた者はいなかった……重要人物の間ではまったく」と回顧した。東南アジアでの勤務経験もあり、国務省でハリマン次官を補佐していたサリバン (William H. Sullivan) も、北との秘密交渉なるものが「どのようなものなのか、まったく明らかではなかった」と述べている。⁶³

かりに彼らが正しかったとすれば、マクナマラがいうように「噂が本当かどうか確信がなかった」ことが第1の原因だろう。9月中旬、国務省情報調査局は「現段階では、そうした報告の正しさを完全に検証することは不可能」だと報告した。その少し後、マッコーン CIA 長官はハリマン (W. Averell Harriman) 政治担当担当国務次官に電話で、自分はサイゴン支局に「この問題にすぐさま集中しろというつもり」だと語った。ハリマンも、こちらはロジ大使に同じことを求めると応じた。マッコーンはこの時、情報が「正しいかどうかわからない」と本音を漏らしている。⁶⁴ アメリカの暗中模索ぶりは、ハノイに代表部を持つフランス経由で情報が欲しいと、ラスクがアルファン (Hervé Alphand) 駐米大使に要請したほどだった。10月後半になってすら「新たな確証がまったく現れない」ことがワシントンを悩ませていた。⁶⁵

第2に、ノルティングが力説したような、「ニューはホー・チ・ミンと実際に交渉などするはずはないし、北ベトナムとの統一に向かって動くはずもない。彼は反共の大義にコミットしているのだ」という確信も、ワシントンの目を曇らせる要因となった。ジェムの右腕といわれたグエン・ジン・トゥアン国務相も、経済援助使節団 (USOM) の一員として戦略村計画を担当するフィリップス (Rufus C. Phillips) に向かって、北との和解について「現時点では深刻な危険など存在しない。なぜならニューは現状のあり方にしごく満足しているからだ」と胸を叩いていた。⁶⁶ だからベトナム政府が休戦や中立化といった和解に本気で関心を抱いている確率は「五分五分以下」だとの判断が生まれたのである。⁶⁷

10月末になってもケネディは「フランス政府が南北ベトナム間の何らかの和解をめざして努力しているとの噂は、具体的に証拠づけられてはいない。2つのベトナムが間接的なチャンネルで接触を持つ可能性は除外できないが、ベトナム政府筋の声明

は北からの軍事的侵略が続く限りいかなる和解もありえないとして、明瞭に否定している」との説明を受けている。ありえない、いやあって欲しくないという思いこみがワシントンでいかに強かったかの表れである。⁶⁸

第3に、たとえニューがそうした企てに走ったとしても、「ジェムがおそらくそうした行動を、ホー・チ・ミンとの取引以前の時点で止めるだろう」と見られていた。ジェム自身、1963年夏にヒギンズのインタビューに答え、「再統一について語る者は多いが、その再統一と自由の存続の折り合いをどうつければよいのかを語ろうとする者はほとんどいない」と述べている。共産主義者は「侵略者」、自分たちは「侵略の犠牲者」だとするジェムは「武力侵略に屈することはしない決意」を強調した。国務省でベトナム通として知られたカッテンバーグはのちになっても「南ベトナムをめぐる共産主義者との交渉にはジェム自身が絶対に同意しなかったろう」と述べている。⁶⁹北との交渉という考え方は、南ベトナムの国民の間でも、政府や軍内部の指導層でも受け入れられていないとの報告もあった。⁷⁰

だがそれでも、風評も含めて度重なる報告に、ワシントンの懸念はつのるばかりだった。ラスクは9月11日、「ニューがわれわれの要求を受け入れがたいと思えば、北ベトナムのほうを向き、彼らと取引にかかる可能性がある」と言明した。彼はヒルズマンに電話で「北に向かって発せられる信号を懸念している」と漏らしている。ジェムがハノイとの和解という解決策を「試みたかもしれないという証拠がある」し、実際に当時「在サイゴン大使館にいたアメリカ人の多くは彼がそうする可能性を懸念していた」とマクナマラも回想する。⁷¹

ワシントンがかねてニューに抱くイメージが大きな意味を持っていた。彼は「自分自身の目的のためなら何でもする」危険な人物と見られていたからである。⁷²ニューは「2つのいずれも不可能な選択肢の間に閉じこめられるのを避ける」ために、彼が抱く「ハノイ政権に対する根深い憎悪」を抑えて和解を求める可能性があった。その選択肢とは、アメリカの圧力に白旗を掲げるか、敗北によって権力を喪失するかである。その際必要なら「米軍の除去という、ベトナム民主共和国が最小限行うことが確実な要求」すら容れる恐れがあった。⁷³

ロジは8月末、ニューの「非常に気まぐれな」な精神状態を考えると北に対する和解もありえなくはないとの判断を示した。程度の差こそあれ、ニューとジェムが行う「自分の能力、この国の利益、共産主義の脅威についての基本的判断は、もはや安定したものでも現実的なものでもない」とクーパーは分析している。つまり南ベトナムの命運を左右する2人の兄弟は「もはや理性的ではない」状態にあり、何をしでかさかわからない、もはや放置できないというわけである。⁷⁴

4.2. 南北合意は容認できず

9月末から10月初めにかけて南ベトナムを視察したマクナマラ国防長官とテイラー (Maxwell D. Taylor) 統合参謀本部議長が大統領に報告したように、アメリカはニューが「北ベトナムとの交渉という考えをもてあそんでいること」に困惑しきっていた。それは何よりも「アメリカの諸目的に基本的に合致しない可能性」があったからである。国務省内でサリバンが懸念していたように、好機を活用するどころか、ニューが、これまで権力基盤として依存してきた要素の1つだったはずのアメリカの軍事力を「北ベトナムとの取引によって追い出す」可能性への恐怖心がワシントンを支配していた。この年夏まで大使としてサイゴンに赴任していたノルティングはだからケネディ政権が「即座に叛逆だとして反応」したとし、いくら自分が尽力してもそれを止められなかったのだと述懐している。⁷⁵

ではどのように北との交渉を阻止するか。ヒルズマンはそうした事態に備え、いくつかの選択肢を提示した。警告と援助停止の脅しをかけること、將軍たちにクーデターを急がせること、時期を選んで彼らの行動を世界に公表すること、などである。ニュー自身、共産側と交渉したりすればアメリカ側の不快感を増し、したがって身の危険が生じることは百も承知だった。⁷⁶

一族のうち生き残ったニュー夫人はのちに、アメリカがジェム政権打倒クーデターに踏み切ったのは、仏教徒危機と並んで、ジェム兄弟による北との和解を阻止するためだったと非難した。クーデター勃発の前々日にジェムの命で帰国したチャン・バン・ジン (Tran Van Dinh) 駐ワシントン代理大使は、クーデターの切迫を知り、アメリカとまともな話をする気を失ったジェムが「アメリカに出て行けと命じる寸前」だったと回想する。⁷⁷ ケネディ政権が、アメリカの意図と関わりなく南北和解が実現する可能性を恐れ、あるいは少なくともそれを歓迎せず、力づくでのジェム政権排除に踏み切ったと批判する者は少なくない。⁷⁸

こうしたケネディ批判を否定する者もいる。南北交渉は「十分現実的な問題とは思えず、したがってクーデターに対するアメリカの態度を決める大きな要因ではなかった」とシュレジンガーはいう。たしかに北との和解に「ケネディの顧問たちはきわめて冷淡」だったけれども、要するに「彼らはすでにジェムとニューの除去を決断しており、敵との交渉など問題外と考えられたのだ」と見るのはチャン・バン・ドンである。⁷⁹

だが危機感をつのらせていたのは南ベトナム政府軍の將軍たちも同じだった。のちに南ベトナムの指導者となるグエン・カーン (Nguyen Khanh) 准将は、彼ら軍首脳の一部に、「南ベトナムの反共の立場が疑問にさらされているこの時、政治家どもから命令など受けない決意」だと CIA 要員に語った。その政治家とは「ニュー一家」のことであり、將軍たちは「政治家どもが今、北ベトナムとの合意の方向に進もうと考

えていることを恐れている」のだと明らかにした。⁸⁰ もしそれが阻止できないのであれば、「クーデターを起こして『南ベトナムを救う』」ことも視野に入っていた。⁸¹

9月末にサイゴンを訪れたマクナマラのもとには、あるベトナム軍の大佐がニューから「北ベトナムとの交渉に軍はどう反応するか」と聞かれ、「交渉を始めればあなたは24時間も生き残れまい」と警告を発したとの報告が寄せられていた。しかもCIAサイゴン支局からは、将軍たちが「ニューが北と合意を目指して交渉に入っているという証拠が増えていることに懸念を増大させつつある」との報告があった。ニュー自身が将軍たちを前に、マネリを経由した南北貿易の提案などを検討するつもりだと得々と論じたからなおさらだった。だから国防省の国際安全保障局で極東問題を扱っていたハインツ (Luther C. Heinz) はのちに、「ジェムを放逐したクーデターの原因は、少なくとも実際にそれを起こさせたのは、ほかならぬ弟のニュー」だったとの確信を披瀝している。⁸²

ジェム打倒クーデターの成功後、ファン・ドン・ラム (Pham Dong Lam) 新外相はロッジ大使に、アメリカがクーデターを支持したのはニューが北ベトナムと接触し中立化による和平を求めたからだ、いや新政府樹立による中立化実現を望んだのはアメリカだ、といった相矛盾する噂がサイゴンに満ちているとし、そうした疑念を払拭すべく早急な新政府承認を求めている。クーデター当日、ワシントンからはロッジに、新政府に対して「ニューが共産側と取引し、反共の大義を裏切った」ことを喧伝することが持つ「高い価値をできる限り早い時期に強調すべき」だと指示があった。実際にロッジは将軍たちに、ニューと共産主義者の取引の事実を強調するよう伝えた。⁸³

11月1日以降、南北交渉による休戦の可能性は事実上消えた。しかし、新政権の指導者ズオン・バン・ミン (Duong Van Minh) 将軍もその同僚たちも基本的には「反共主義者でなく非共産主義者」(マクナマラ) だった。⁸⁴ 彼が率いる新政権は民族解放戦線との和解を必ずしも排除せず、むしろじょじょにその方向に進む気配すらあった。彼らの内部に存在する非共産主義的勢力を引きつけたいと考え、アメリカの意向とは自立的に行動する傾向も見られた。民族解放戦線のチュオン・ニュー・タンによれば、ズオン・バン・ミンの弟がハノイで北ベトナム人民軍の大佐であり、彼が連合政府樹立を働きかけたともいう。⁸⁵

だが新政権に敵との対決姿勢を望むアメリカは、こうした和解への傾斜を恐れ、妨害に乗りだした。ミン政権がサイゴン中立化・民族解放戦線との和解についてのワシントンの関心と許容度を過大に見積もったのが「致命的な誤算」だったとマクナマラは述懐している。米軍事顧問引き揚げ要求の場合と同じく、ベトナムで勝利を求め続け、しかも1963年後半にはそれまでのように戦況を楽観できなくなったケネディ政権は、北との接触などまったく認めようとしなかったのである。⁸⁶

おわりに

神話の信奉者たちの言にしたがえば、ケネディはなんとしてもベトナムの泥沼から抜け出す手だてを講じようとして懸命だった。仏教徒危機、すなわちジェム政権の無能ぶりの露呈こそその好機だった。国務省のベトナム担当カッテンバーグは、1963年後半の数ヶ月間、アメリカがベトナム介入を継続するかどうかを真摯に検討する「最後の、最良の機会」だったと見る。⁸⁷

そのジェム政権の倒壊もまた、アメリカがいっさいの過去を清算するきっかけとなりえたはずである。⁸⁸ マクナマラ国防長官の述懐によれば、「戦争が始まる前にそれを回避するか、戦争が現実にはるか以前にそれを集結させる機会」がいくつも存在していた。その1つが1963年、アメリカが1954年以来支えてきたジェム政権が倒れた直後の混乱期であり、この時点で「アメリカは撤退できたし、そうすべきだった」と彼はいう。⁸⁹

のちにデタント (Détente) の立て役者の1人となるキッシンジャー (Henry Kissinger) 元国務長官も、「アメリカが許容できる——たしかにまだかなり大きかったが——コストでベトナムから引き揚げることでできた最後の瞬間」として、ジェム政権転覆の「直前か直後」を挙げている。とりわけ「その後の展開からすると、ジェムがその欠点ゆえに自壊していくに任せ、あるいは少なくとも、彼がハノイと画策しているのではと疑われていた交渉の邪魔をせずに撤退したほうが、アメリカにとってはより簡単だったはず」だというわけである。「ジェムとホーの取引は、アメリカが1963年にベトナムから出ていく手だてになりえたかもしれない。……1963年秋、ある種の機会がおそらく失われたのである」と、ケネディの補佐官だったシュレジンガーはいう。⁹⁰

ジェム政権崩壊のわずか3週間後、その機を捉える間もなくケネディはこの世を去ってしまう。しかしそれまで待つ必要はなかった。ケネディは現実には、少なくとも2つの機会を手にしていただけである。もちろんいずれの道も、ある程度のコストをとまっていたに違いない。だがケネディは1961年、その7年前にアイゼンハワー大統領がディエンビエンフーの戦いにおける敗北とベトナム北部の共産化を容認できたのは「それをフランスのせいにするのができた」からであり、翻って自分は「1954年のような敗北を今日受け入れることはできない」という理屈で、大々的な介入拡大政策に乗り出していた。⁹¹ とすれば、引き揚げの理由と責任のいっさいをベトナム人に帰すことで、内外に対してアメリカの面子を保つことが可能だったはずである。⁹² またそれは共産側が非難するように、南ベトナムがけっしてアメリカの傀儡国家ではないと示す意味もあったろう。

だが、現地政府の要求を呑む形での撤退には、つねに一定の条件がつけられていた。

引き揚げの環境が整った時、いいかえればアメリカが望むタイミングでのみ、それは可能だったのである。当のアメリカは、撤退せず戦い続けるコストのほうが、将来の泥沼から手を引くコストよりも低いと見積もっていた。引き揚げ要求を「される」ことと、それを「させる」ことの間には、越えがたい溝があったのである。

南北ベトナム人にみずからの命運を決めさせる交渉についても、東南アジアの安全を脅かさずアメリカの威信にも傷をつけないもの形でない限り、ケネディ政権は認めようとしなかった。この戦争の遂行も、逆にその終結も、アメリカの主導権のもとでなされなければならなかったのである。やはり、南北の和解を求め「させる」ことと、勝手気ままに求め「られる」ことはまったく別物だった。だからこそワシントンにはベトナム側の動きに「否定的に反応」(ノルティング)し続けたのである。⁹³

最も熱心なケネディ弁護者の1人であるソレンセンは、公民権問題への取り組みやキューバ危機の解決、平和部隊の創設などわずか2年10ヶ月間にケネディが上げた業績を強調し、「ケネディが機会を逸したことはほとんどなかった」といいきっている。⁹⁴ だが、ベトナムからの引き揚げはけっして「失われた」機会ではなかった。むしろそれはケネディが「拒んだ」機会にほかならなかった。しかも彼の拒絶にはそれなりの理由があったのである。それを無視して神話に拘泥し、ベトナム戦争史をいたずらにゆがめることは、厳に自戒すべきだろう。⁹⁵

注

¹ この種の議論については以下を参照。Thomas Brown, *JFK: History of an Image*, London: I. B. Tauris, 1988. 平田雅己「ケネディ・ベトナム撤退論の検証」『国際関係学部研究年報』(日本大学)第19集(1998年2月)。拙稿「大規模介入と完全撤退の狭間——ケネディのベトナム政策をめぐる」『筑波法政』第39号(2005年9月)。

² シオドア・C・ソレンセン(山岡清二訳)『ケネディの遺産——未来を拓くために』サイマル出版会, 1970, p. 180.

³ Kenneth P. O'Donnell & David F. Powers (with Joe McCarthy), *Johnny, We Hardly Knew Ye*, : *Memories of John Fitzgerald Kennedy*, Boston: Little, Brown, 1972, p. 18.

⁴ Kennedy in Arthur M. Schlesinger, Jr., *Robert Kennedy and His Times*, New York: Ballantine Books, 1979, p. 774. Charles Bartlett, "Portrait of a Friend," Kenneth W. Thompson, ed., *The Kennedy Presidency: Seventeen Intimate Perspectives of John F. Kennedy*, Lanham, Md.: University Press of America, 1985, p. 16.

⁵ O'Donnell & Powers, *op. cit.*, pp. 382-3.

⁶ Theodore C. Sorensen, *Kennedy*, New York: Harper & Row, 1965, p. 7. 南ベトナムによる米軍撤退要求と、南北ベトナム間の交渉については、とくに以下が有益である。Geoffrey Warner, "The United States and the Fall of Diem (Part I & II)," *Australian Outlook*, vol. 28, no. 3 (Dec. 1974) & vol. 29, no. 1 (April 1975). Ellen J. Hammer, *A Death in November: America in Vietnam, 1963*, New York: E. P. Dutton, 1987. Fredrik Logevall, *Choosing War: The Lost Chance for Peace and the Escalation of War in Vietnam*, Berkeley: University of California Press, 1999.

⁷ Telegram, U.S. Embassy in Saigon to U.S. Dept. of State [以下DOS] 882, April 5, 1963, U.S.

Dept. of State, *Foreign Relations of the United States, 1961-1963* [以下FRUS], vol. 3 (Vietnam January-August 1963), Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office [以下USGPO], 1991, p. 209. CIA Information Report Telegram, April 20, 1963, National Security Files [以下NSF], box 197, folder "Vietnam, General 4/19/63-4/30/63," John F. Kennedy Library, Boston [以下JFKL].

⁸ Memorandum of Conversation with Nhu, April 12, 1963, *FRUS*, 3, p. 223. Philip Catton, *Diem's Final Failure: Prelude to America's War in Vietnam*, Lawrence: University Press of Kansas, 2002, p. 158.

⁹ Nhu in *FRUS*, 3, p. 294n. Frederick Nolting, *From Trust to Tragedy: The Political Memoirs of Frederick Nolting, Kennedy's Ambassador to Diem's Vietnam*, New York: Praeger, 1988, p. 99.

¹⁰ Letter, Janow to Phillips, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 303. Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, vol. 4 (Vietnam August-December 1963), USGPO, 1991, p. 125. Telegram, London to DOS 1244, Sept. 12, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL.

¹¹ Telegram, Saigon to DOS 640, Oct. 5, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 9/22/63-10/5/63, State Cables," JFKL. John Mecklin, *Mission in Torment: An Intimate Account of the U.S. Role in Vietnam*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1965, p. 238.

¹² Special National Intelligence Estimate [以下SNIE] 53-2-63, "The Situation in South Vietnam," July 10, 1963, U.S. Dept. of Defense, *United States-Vietnam Relations 1945-1967: Study Prepared By the Department of Defense* [以下USVR], USGPO, 1971, book 12, p. 533. Telegram, Saigon to DOS 882, April 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 211.

¹³ Diem in Marianna P. Sullivan, *France's Vietnam Policy: A Study in French-American Relations*, Westport, Conn.: Greenwood Press, 1978, p. 67. Telegram, Saigon to DOS 403, Sept. 2, 1963, *FRUS*, 4, p. 84.

¹⁴ William Colby (with James McCargar), *Lost Victory: A Firsthand Account of America's Sixteen-Year Involvement in Vietnam*, Chicago: Contemporary Books, 1989, p. 39. Hammer, *op. cit.*, p. 203.

¹⁵ Catton, *op. cit.*, p. 196. Hammer, *op. cit.*, pp. 151, 269. Chester L. Cooper, *The Lost Crusade: America in Vietnam*, New York: Dodd, Mead, 1970, p. 206.

¹⁶ SNIE 53-2-63, July 10, 1963, *USVR*, 12, p. 533. Robert S. McNamara, James G. Blight & Robert K. Brigham, *Argument Without End: In Search of Answers to the Vietnam Tragedy*, New York: Public Affairs, 1999, p. 112.

¹⁷ Telegram, Saigon to DOS 882, April 5, 1963, *FRUS*, 3, p. 208. Mecklin, *op. cit.*, p. 22.

¹⁸ Roger Hilsman, *To Move a Nation: The Politics of Foreign Policy in the Administration of John F. Kennedy*, New York: Dell Publishing, 1967, p. 498. Telegram, Saigon to DOS 652, Oct. 7, 1963, *FRUS*, 4, pp. 385-6. Mecklin, *op. cit.*, p. 239.

¹⁹ Telegram, Saigon to DOS 496, Sept. 12, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL. Robert S. McNamara (with Brian VanDeMark), *In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam*, New York: Times Books, 1995, pp. 74-5. U.S. Congress, Senate, Committee on Foreign Relations, *U.S. Involvement in the Overthrow of Diem, 1963*, USGPO, 1972, p. 20.

²⁰ Foreign Broadcast Information Service 35, May 17, 1963, NSF, 197, "Vietnam, General 5/18/63-5/31/63," JFKL. Telegram, DOS to Saigon 1098, May 16, 1963, NSF, 197, "Vietnam, General

5/1/63-5/17/63," JFKL.

- ²¹ *FRUS*, 3, p. 295n. Memorandum, Janow to Phillips, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 301.
- ²² Howard J. Langer, *The Vietnam War: An Encyclopedia of Quotations*, Westport, Conn.: Greenwood Press, 2005, p. 70. Memorandum, Wood to Hilsman, April 18, *FRUS*, 3, p. 244. Telegram, DOS to Saigon 970, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p. 235.
- ²³ President's News Conference, May 22, 1963, *Public Papers of the Presidents of the United States, John F. Kennedy, 1963* [以下PPP], USGPO, 1964, p. 421.
- ²⁴ Telegram, DOS to Saigon 1098, May 16, 1963, NSF, 197, "Vietnam, General 5/1/63-5/17/63," JFKL. Telegram, DOS to Saigon 1104, May 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 308.
- ²⁵ Telegram, DOS to Saigon 1084, May 13, 1963, *FRUS*, 3, p. 295.
- ²⁶ Telegram, Saigon to DOS 882, April 3, 1963, *FRUS*, 3, pp. 208-9, 211-2.
- ²⁷ Telegram, DOS to Saigon 1084, May 13, 1963, *FRUS*, 3, pp. 294-6.
- ²⁸ Telegram, Saigon to DOS 505, Sept. 13, 1963, *FRUS*, 4, p. 203. Telegram, CINCPAC to DOS DTG 020030Z (Navy Message), NSF, 199, "Vietnam, General 9/1/63-9/10/63, Defense Cables," JFKL. Mecklin, *op. cit.*, p. 244.
- ²⁹ President's News Conference, Nov. 14, 1963, *PPP*, p. 846. Sorensen, *op. cit.*, pp. 649-50.
- ³⁰ Memorandum, Heavner to Hilsman, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 305. Telegram, DOS to Saigon 1104, May 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 309.
- ³¹ Telegram, Saigon to DOS 893, April 9, 1963, *FRUS*, 3, p. 217.
- ³² Telegram, Saigon to DOS 1043, May 20, 1963, *FRUS*, 3, p. 309n. Telegram, Saigon to DOS 1056, May 23, 1963, *FRUS*, 3, p. 325. Memorandum, "Briefing Paper fo President's News Conference, May 22, 1963, The Far East," n.d. Presidential Office Files [以下POF], box 60, folder "Press Conferences, 5/22/63, Background Materials II," JFKL.
- ³³ Joint Communique by Diem and Nolting, May 17, 1963, U.S. Dept. of State, *American Foreign Policy: Current Documents, 1963*, USGPO, 1967, pp. 854-5.
- ³⁴ Telegram, Saigon to DOS 1056, May 23, 1963, *FRUS*, 3, pp. 324-5.
- ³⁵ Memorandum of Conversation in Saigon, July 17, 1963, *FRUS*, 3, p. 508.
- ³⁶ Lalouette in Hammer, *op. cit.*, p. 232. Memorandum, Heavner to Hilsman, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p. 305. Telegram, Saigon to DOS 652, Oct. 7, 1963, *FRUS*, 4, p. 386.
- ³⁷ Warner, *op. cit.* (1974), p. 248.
- ³⁸ Francis X. Winters, *The Year of the Hare: America in Vietnam, January 25, 1963-February 15, 1964*, Athens: University of Georgia Press, 1977, p. 60. Warner, *op. cit.* (1974), pp. 255-6. Hammer, *op. cit.*, p. 221.
- ³⁹ Telegram, CIA Saigon to CIA, Sept. 2, 1963, *FRUS*, 4, p. 89.
- ⁴⁰ CIA Information Report Telegram, Sept. 27, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 9/22/63-10/5/63, CIA Reports," JFKL. Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 125.
- ⁴¹ Hammer, *op. cit.*, pp. 227-8. CIA Memorandum, "The Possibility of a GVN Deal with North Vietnam," Sept. 14, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, Memos and Miscellaneous, Part I," JFKL.

- ⁴² Logevall, *op. cit.* (1999), p. 7. Hersh, *op. cit.*, p. 417.
- ⁴³ Telegram, CIA Saigon to CIA, Sept. 2, 1963, *FRUS*, 4, p. 89. Telegram, London to DOS 1158, Sept. 10, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/1/63-9/10/63, State Cables, Part II," JFKL.
- ⁴⁴ Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 30, 1963, *FRUS*, 4, p. 55. Telegram, Saigon to DOS 515, Sept. 16, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL.
- ⁴⁵ Hammer, *op. cit.*, p. 121. Sullivan, *op. cit.*, p. 67. Logevall, *op. cit.* (1999), p. 14.
- ⁴⁶ Telegram, Saigon to DOS 391, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 67.
- ⁴⁷ Warner, *op. cit.* (1975), p. 8. Hammer, *op. cit.*, p. 230.
- ⁴⁸ Catton, *op. cit.*, p. 194. Warner, *op. cit.* (1974), p. 257. Hammer, *op. cit.*, p. 222.
- ⁴⁹ Nolting, *op. cit.*, p. 118. Telegram, CIA Saigon to CIA, Sept. 2, 1963, *FRUS*, 4, p. 90. Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 126.
- ⁵⁰ Forrestal, Oral History [以下OH], JFKL, p. 143. Telegram, Saigon to DOS 496, Sept. 12, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL. Mecklin, *op. cit.*, p. 238.
- ⁵¹ Colby, *op. cit.*, p. 150. Memorandum of Conference at White House, Aug. 29, 1963, 1963, *FRUS*, 4, p. 27. Memorandum, Hilsman to Rusk, Sept. 16, 1963, *FRUS*, 4, p. 221.
- ⁵² Memorandum of Conversation in Saigon, Sept. 30, 1963, *FRUS*, 4, p. 324. Nguyen Ngoc Tho in Gerald C. Hickey, *Window on a War: An Anthropologist in the Vietnam Conflict*, Lubbock: Texas Tech University Press, 2002, p. 104.
- ⁵³ Colby, *op. cit.*, p. 103. Memorandum, Hughes to Rusk, Sept. 15, 1963, *FRUS*, 4, p. 214.
- ⁵⁴ Memorandum for McCone, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 296. Telegram, Paris to DOS POLTO 306, Sept. 20, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 9/18/63-9/21/63, State Cables," JFKL.
- ⁵⁵ Mecklin, *op. cit.*, p. 238. Paul M. Kattenburg, *The Vietnam Trauma in American Foreign Policy, 1945-75*, New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1980, p.120. Memorandum, CIA South Vietnam Working Group to McCone, Sept. 30, 1963, *Declassified Documents Reference System* [以下DDRS], Arlington, Va.: Carrolton Press, fiche no. 1986-619.
- ⁵⁶ チュオン・ニュー・タン (吉本晋一郎訳) 『ベトコン・メモワール——解放された祖国を追われて』原書房, 1986, p. 62. 友田錫 『裏切られたベトナム革命——チュン・ニュー・タンの証言』中央公論社, 1981, p. 84. 他に対米交渉におけるベトナム側の脅しという意図を強調するものとして以下がある。Warner, *op. cit.* (1974), p. 257. Michael Lind, *Vietnam: The Necessary War*, New York: Free Press, 1999, p. 156. Logevall, *op. cit.* (1999), p. 7. Seth Stephen Jacobs, *Cold War Mandarin: Ngo Dinh Diem and the Origins of America's War in Vietnam, 1950-1963*, Lanham, Md.: Rowman & Littlefield, 2006, p. 166. Ilya V. Gaiduk, *Confronting Vietnam: Soviet Policy toward the Indochina Conflict, 1954-1963*, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 2003, p. 202.
- ⁵⁷ Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, pp. 125-6. Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, p. 126.
- ⁵⁸ Memorandum for McCone, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 296. デービッド・ハルバスタム (泉之・林雄一郎訳) 『ベトナム戦争』みすず書房, 1968, pp. 208. Marguerite Higgins, *Our Vietnam Nightmare*, New York: Harper & Row, 1965, p. 194. Fredrik Logevall, *The Origins of the Vietnam War*, Harlow, U.K.: Pearson Education, 2001, p. 50. Gaiduk, *op. cit.*, p. 201. Forrestal, OH, JFKL, p. 143.
- ⁵⁹ Schlesinger, *op. cit.*, pp. 774, 777. Nolting, *op. cit.* pp. 117-8. Mecklin, *op. cit.*, p. 238. McNamara,

op. cit., p. 51.

⁶⁰ Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 72. Memorandum, Hughes to Rusk, Sept. 15, 1963, *FRUS*, 4, p. 214.

⁶¹ Telegram, Saigon to DOS 410, Sept. 4, 1963, *FRUS*, 4, p. 111n. Telegram, CIA Saigon to CIA 0698, Sept. 6, 1963, *FRUS*, 4, pp. 125-6. CIA Memorandum, Sept. 14, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, Memos and Miscellaneous, Part I," JFKL.

⁶² Seymour M. Hersh, *The Dark Side of the Camelot*, Boston: Little, Brown, 1997, pp. 423-4. Memorandum of Conference with Eisenhower, Sept. 19, 1963, *DDRS*, on-line document no. CK3100097701. Tran Van Don, *Our Endless War: Inside Vietnam*, San Rafael, Ca.: Presidio Press, 1978, p. 53.

⁶³ Bundy in Schlesinger, *op. cit.*, p. 776. Hilsman, OH, JFKL, p. 33. Sullivan, OH, p. 46.

⁶⁴ McNamara, *op. cit.*, p. 51. Research Memorandum RFE-78, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 184. Memorandum of Telephone Conversations, Sept. 13, 1963, *FRUS*, 4, p. 204.

⁶⁵ Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 30, 1963, *FRUS*, 4, p. 60. CIA Memorandum OCI 2370/63, "Events and Developments in South Vietnam, 5-18 October," Oct. 19, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 10/6/63-10/16/63, Memos and Miscellaneous," JFKL.

⁶⁶ Memorandum of Conversation at DOS, Aug. 30, 1963, *FRUS*, 4, p. 54. Telegram, Saigon to DOS 447, Sept. 9, 1963, *FRUS*, 4, p. 139.

⁶⁷ Memorandum, Cooper to McCone, Sept. 19, 1963, *DDRS*, 1978-343B, p.1. Memorandum for McCone, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 296.

⁶⁸ "Briefing Paper for President's News Conference, October 31, 1963, The Far East," POF, 61, "Press Conferences, 10/31/63, Background Materials II," JFKL.

⁶⁹ Research Memorandum RFE-78, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, p. 184. Higgins, *op. cit.*, p. 176. Kattenburg, *op. cit.*, p. 121.

⁷⁰ Telegram, Saigon to DOS 470, Sept. 11, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, State Cables," JFKL. Telegram, Saigon to DOS 473, Sept. 11, 1963, *ibid.* Telegram, COMUSMACV to DOS J 01 7384 (Army Message), Sept. 11, 1963, NSF, 199, "Vietnam, General 9/11/63-9/17/63, Defense Cables," JFKL.

⁷¹ Memorandum of Conversation at White House, Sept. 11, 1963, *FRUS*, 4, pp. 185-6. Memorandum of Telephone Conversation, Sept. 19, 1963, *FRUS*, 4, p. 264. McNamara, et al., *op. cit.*, p. 165.

⁷² CIA Information Report Telegram, TDCS DB-3/656,792, Sept. 23, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 9/22/63-10/5/63, CIA Reports," JFKL.

⁷³ Memorandum, Cooper to McCone, Sept. 19, 1963, *DDRS*, 1978-343B, pp.2-3. Memorandum for McCone, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 297.

⁷⁴ Telegram, Saigon to DOS 391, Aug. 31, 1963, *FRUS*, 4, p. 68. Memorandum, Cooper to McCone, Sept. 19, 1963, *DDRS*, 1978-343B, pp. 4-5. Memorandum for McCone, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 298.

⁷⁵ Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct. 2, 1963, NSF, 200, "Vietnam, General 9/22/63-10/14/63, McNamara-Taylor Report," JFKL. Memorandum, Sullivan to Hilsman, Oct. 3, 1963, *FRUS*, 4, pp. 357-8. Nolting, OH, JFKL, p. 81.

⁷⁶ Memorandum, Hilsman to Rusk, Aug. 30, 1963, *FRUS*, 4, p. 50. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 53.

- ⁷⁷ Madame Nhu in R. B. Smith, *An International History of the Vietnam War*, London: Macmillan, 1985, vol. 2, p. 200. Tran Van Dinh in Hersh, *op. cit.*, pp. 433-4.
- ⁷⁸ Lind, *op. cit.*, p. 156. Smith, *op. cit.*, p. 201. Gaiduk, *op. cit.*, p. 202. Logevall, *op. cit.* (1999), p. xx, 48-9. Logevall, *op. cit.* (2001), pp. 52-3. Hersh, *op. cit.*, p. 412, 417-8, 423. Hickey, *op. cit.*, p. 104. George C. Herring, "The Vietnam War," John M. Carroll & George C. Herring, eds., *Modern American Diplomacy*, Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1986, p. 174. Michael L. Dockrill, *The Cold War 1945-1963*, London: Macmillan Education, 1988, p. 84. Lloyd C. Gardner, "Fighting Vietnam: The Russian-American Conundrum," Lloyd C. Gardner & Ted Gittinger, eds., *International Perspectives on Vietnam*, College Station: Texas A&M University Press, 2000, p. 27. Kees van der Pijl, *Global Rivalries: From the Cold War to Iraq*, London: Pluto Press, 2006, p. 79.
- ⁷⁹ Schlesinger, *op. cit.*, p. 777. Tran Van Don, *op. cit.*, p. 53.
- ⁸⁰ Telegram, CIA Saigon to CIA 0291, Aug. 25, 1963, *FRUS*, 3, p. 633.
- ⁸¹ Memorandum, Cooper to McCone, Sept. 19, 1963, *DDRS*, 1978-343B, p. 4.
- ⁸² Report by McNamara, Sept. 26, 1963, *FRUS*, 4, p. 294. Telegram, CIA Saigon to CIA 0940, Sept. 17, 1963, *FRUS*, 4, p. 239. Heinz, OH, JFKL, p. 40.
- ⁸³ Telegram, Saigon to DOS 977, Nov. 8, 1963, *FRUS*, 4, p. 588. Telegram, DOS to Saigon 674, Nov. 1, 1963, *FRUS*, 4, p. 521. Telegram, Saigon to DOS 871, Nov. 1, 1963, *FRUS*, 4, p. 521n.
- ⁸⁴ McNamara, et al., *op. cit.*, p. 114.
- ⁸⁵ Gary R. Hess, *Vietnam and the United States: Origins and Legacy of War*, Boston: Twayne Publishers, 1990, p. 78. 友田, 前掲, p. 85.
- ⁸⁶ Logevall, *op. cit.* (1999), p. 64. Logevall, *op. cit.* (2001), pp. 60-1. McNamara, et al., *op. cit.*, p. 114.
- ⁸⁷ George McT. Kahin, *Intervention: How America Became Involved in Vietnam*, New York: Anchor Press, 1987, p. 147. Winters, *op. cit.*, p. 138. Kattenburg, *op. cit.*, p. 119.
- ⁸⁸ Leslie H. Gelb & Richard K. Betts, *The Irony of Vietnam: The System Worked*, Washington, D.C.: Brookings Institution, 1979, p. 93. Robert Shaplen, "Assassination in Saigon," Terrence Maitland, Stephen Weiss & Editors of Boston Publishing, Co., *The Vietnam Experience: Raising the Stakes*, Boston: Boston Publishing, 1982, p. 89. Bruce Palmer, Jr., *The 25-Year War: America's Military Role in Vietnam*, Lexington: University Press of Kentucky, 1984, p. 23.
- ⁸⁹ McNamara, et al., *op. cit.*, p. xi. McNamara, *op. cit.*, p. 320.
- ⁹⁰ Henry Kissinger, *Ending the Vietnam War: A History of America's Involvement and Extrication from the Vietnam War*, New York: Simon & Schuster, 2003, p. 37. Arthur M. Schlesinger, Jr., *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House*, Boston: Houghton Mifflin, 1965, pp. 777-8.
- ⁹¹ *Ibid.*, p. 339.
- ⁹² Logevall, *op. cit.* (2001), p. 49. Winters, *op. cit.*, p. 207.
- ⁹³ Nolting, *op. cit.*, p. 118.
- ⁹⁴ Sorensen, *op. cit.*, p. 756.
- ⁹⁵ 交渉解決を拒否したケネディの責任を強調するものとして以下がある。Lind, *op. cit.*, p. 156. Marilyn B. Young, *The Vietnam Wars: 1945-1990*, New York: Harper Collins, 1991, p. 102. Richard J. Walton, *Cold War and Counterrevolution: The Foreign Policy of John F. Kennedy*,

New York: Viking Press, 1972, p. 181. Jacobs, *op.cit.*, p. 166.